リレー随筆

かっこいい女論法

鹿児島大学病院 初期研修医 植之原 里香

はじめに

はじめまして。鹿児島大学病院，初期研修医の植之原里香と申します。昨年，今村総合病院で研修をさせていただいたのですが，そこで出会った友人の大藪くんからリレー随筆のお話があり，参加させていただくことになりました。

そもそも随筆って何？と思って調べてみると，自身の体験や読書を通して考えたことを書いた文章とのことでした。なるほど，だからみんな好きなものや医療について語っているのか，と納得すると同時に，語るほどの趣味を持ち合わせていないことに焦りを覚えました。

そこからしばらく『どうしよう，テーマ何にしよう』と頭を悩ませ，とうとうこのテーマに行き着きました。分別過ぐれば愚に返る，ということわざはこういう時に使うのですね。大変拙い文章ではございますが，最後まで読んでいただければ幸いです。

かっこいい女論法

私は生き様がかっこいい女性に並々ならぬ憧れを抱いており，『かっこいい女ならどうするか』という視点でものごとを決めることがよくあります。

例えば疲れて帰った金曜日，洗濯物がたまっていたとします。もちろんすぐ寝たい，でもそんなとき『かっこいい女はきっと洗濯をしてから寝るよな』と思うことで頑張れたりするのです。

これが，かっこいい女論法です。

かっこいい女は10km走る

私は身長168cm，いかにもバレー部やバスケ部で活躍していそうな見た目だとよく言われるのですが，昔からとにかく運動が苦手でした。なんといっても足が遅い。いわゆるぶりっこ走りで，学級対抗全員リレーなんか明らかに足を引っ張っている存在。もちろん体育なんて大嫌いでした。

そんな私が，大学5年生の時突然『10km走れる女ってかっこいいかも』と思いました。そしてすぐ最寄りの靴屋さんにランニングシューズを買いに行きました。

『私ってどのくらい走れるんだろう。高校の時はロードレース大会（桜島の周りを男子10km，女子5km走る伝統行事）で一応完走できてたし，大学時代は運動部だったし，3kmはいける…？』なんて考えながらランニングコースを走ってみると，びっくり仰天700mしか走れませんでした。体力の衰えとは恐ろしいものです。

ちょうど新型コロナウイルスの関係で実習が1ヶ月ほど休みになり，時間はたっぷりありました。速度はゆっくりなのですが，毎日ちょっとずつ走る距離が伸びていくのが楽しくて，晴れている日はほとんど走りに行きました。そして半年ほど経った2020年11月25日，私は1時間4分かけて念願の10kmを完走しました。

この日以降，私はすっかり走りに行かなくなりました。私の人生で10km走ったのはこの11月25日だけです。でも，この日を境に私は『10km走れる女』の称号を手に入れました。運動が苦手なこと

に変わりはないのですが「私，走るの本当に遅くて！」と自虐する時も，（でも実は10km走れます！と）心の中で言うことで，少しだけ運動できない劣等感をかき消してくれるのです。

ちなみに10km走れる女・植之原は最近また走るようになったのですが，ジムのランニングマシーンで距離を10kmに設定しても，『まあ10km走れたことあるし，今日は5kmでもかっこよくない？』といつも途中でマシンを降りてしまいます。

かっこいい女は弱音を吐かない

これは大学6年生の頃，とあるホームセンターで商品の値札シールを貼り替えるアルバイトをしました。古い値札と新しい値札がどちらも見えるように貼らなければならず，小さな商品は工夫がいるため作業が複雑になります。私はボールペン売り場の担当になりました。手先が不器用な私は，『私も大きい段ボールにペタペタ貼るだけの部門がいいなあ』と思いましたが，ここでかっこいい女論法が発動します。かっこいい女なら，きっと苦手な作業でも楽しんでやるはず。

私は不器用なのでセロハンテープをうまく使いこなせず手がベトベトになっていましたが，『この作業めっちゃ楽しい，私の天職かも』と自分に言い聞かせて頑張りました。そんな作業中にアルバイトを統括している部長さんが声をかけてくださいました。

「ごめんね。この大変な部門お願いすることになってしまって。」

「いえいえ，大丈夫です！ちょっと慣れてきて，楽しくなってきました！」

私はベトベトな手を見なかったことにして笑顔で元気よく答えました。かっこいい女として完璧な振る舞いだったな，なんて浮かれていました。悲劇のはじまりなんてつゆとも知らず。

なんとかボールペン売り場の作業を終えると，「植之原さん，細かい作業が好きらしい」ということで絵の具チューブ売り場に配置されてしまったのです。ここから私は，工具（ねじ，釘），携帯ストラップなど小さい商品コーナーを転々とすることになりました。

弱音を吐かない女はかっこいい。でも強がらずに苦手なことを正直に伝えるのも時には大切。このアルバイトで得た知見でした。

かっこいい女はバイクに乗る

私の両親は二輪免許を持っています。しかも大型。父のうしろに私，母のうしろに姉が乗って4人でツーリングをしたのは，私の中で色褪せない思い出です。大学時代の親友がバイクに乗っていたこともあり，私もいつか二輪の免許を取ろうと胸に秘めていました。

2023年ついにその時が来ました。何かきっかけがあったわけではないのですが，突然バイクに乗りたくなってしまったのです。『しかもみんなに内緒で免許とったら，かっこよくない？』ということで，私は誰にも言わずに自動車学校に入校しました。

「土日しか通えないけど，できるだけ早く免許をとりたいのです」と相談したところ「2ヶ月あればおそらく取れますよ」とのこと。不器用で運動音痴な私が2ヶ月で取得できるのか，甚だ疑問ではありますが，掲載される頃には二輪免許を有するかっこいい女になっていることでしょう。

おわりに

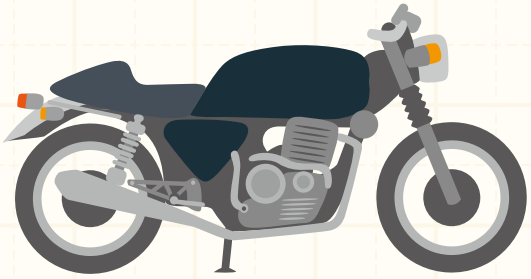
もともと私は国語が大の苦手でした。どのくらい苦手かというと，センター試験の前に担当してくださっていた先生から「文章問題での得点は諦めよう。漢字

と文法の点数は絶対に落とすな。」とアドバイスをいただくほど。夏休みの宿題で作文が出た暁には，規定の枚数に達するまで句読点と改行を多用し，同じ内容をできるだけ長い文章で書き連ねるような高校生でした。

そんな私がリレー随筆のお話をいただいたのが１月。そう，大学入学共通テストの時期です。私は大学生になってから，よく本を読むようになったのですが，『果たして私の読解力で，本当に作者の意図を汲み取れているのか』という不安を拭えずにいました。そこで今年，共通テストの問題を大問ひとつだけ解いてみたところ，高校生の時とは比べものにならないほど答えが当たる当たる。『読書ってすごーい！国語できるようになっちゃったかも！』と調子に乗っていた私は，大藪くんからのお願いをとても軽く引き受けたのでした。

当たり前のことですが，文章を書くのが苦手な人間は，そんな簡単に長い文章を書けるようにはなりません。とても苦労しました。ただ，かっこいい女はきっと「とっても大変だったけど，良い経験だったわ」と言うと思うのです。

このような貴重な場を与えていただいたこと，大変お見苦しい文章（と思考）にもかかわらず，最後まで読んでいただいたこと，深く感謝申し上げます。これからもかっこいい女を目指して一生懸命生きていこうと思います。最後までお付き合いいただき，ありがとうございました。



次号は，鹿児島大学病院 池満 仁司先生のご執筆です。
（編集委員会）